



私が小学生の頃は、ほとんどの小学校の屋外に「二宮金次郎」の銅像と、「百葉箱」(中に温度計を入れて気温を観測する白い箱)があった。それらは時代の流れとともに、いつの間にかほぼ姿を消したようだ。気温の観測は、

その場所の地域特性を学ぶだけでなく、天気による気温の変化を知ったり、グラフ作製作業などの習得にも役立ち、何よりも継続することの大切さを学べるのだが。。

青森市にある青森地方気象台でも平成元年頃、百葉箱が撤去された。観測のほとんどが自動化・デジタル化され、大切な天気(晴れやくもりや雨など)の観測も取りやめや

## 今月のお題 観測は継続が大事

### 県内の主な観測地点の 日最高気温の歴代第1位

観測地点	観測値(℃)	観測年月日
碓ヶ関	37.9	1999年8月10日
深浦	37.9	1978年8月3日
三戸	37.7	1999年7月27日
八戸	37.0	1978年8月3日
弘前	37.0	1978年8月3日
(非公式)	39.2	1971年8月6日
五所川原	36.9	1978年8月3日
青森	36.7	1994年8月12日
黒石	35.9	2006年8月17日

(気象庁データを基に筆者作成)



最近は見られなくなった百葉箱

# 嘆かわしいデータ欠落

省略となった。測候所などが廃止されるまでは、青森のほかに八戸、深浦、むつ、弘前でも天気は観測されていた。今は県内では青森1カ所のでて、観測されているだけだが、3時間ごとの天気は深夜24時だけいつも「不明」、つまり観測されていないのだ。

気象業務では予報が花形と

されているが、実は観測が最も重要である。観測データが不正確だと、予測資料に問題が生じかねないからだ。従って、観測担当者はいかに正確な観測データを一刻も早く送信するかに命をかけていたと言っても過言ではない。

さて、日本の最高気温第1位の公式記録は2013年8月12日、高知県・江川崎の41.0℃であるが、はるか以前の1923(大正12)年9月2日未明に中央気象台(現在の気象庁)で46.3℃が観測されている。その日の観測原簿の備考欄には「一日ノ地震ニ伴フ大火ノ為気温劇昇ス。平均ニ參入セス」とある。つまり、関東大震災の火災によ

る放射熱で温度が上がったのだから、公式記録にしないとという意味であろう。この原簿には一種の感動を覚える。一面火の海の中、実際に気温を観測していた人がいたのだ。

青森県内の最高気温の記録は37.9℃で、1999(平成11)年8月10日に碓ヶ関、78(昭和53)年8月3日に深浦でそれぞれ観測されている。ただ、これはアメダスで観測されたデータ、という限定がつく。実はアメダス導入以前の「幻の最高気温」が、県内にもある。それは、71(同46)年8月6日、弘前の39.2℃である。当時の弘前気象通報所で観測された。青森県では76(同51)年にアメダスが導入されたが、気象庁はデータを統一するために、アメダス以前の観測値を統計に含めないこととした。このため、統計から消えたのだ。

テレビでは「点検のため欠測」と簡単にアナウンスされることがあるが、データの継続収集の大切さや、データ自体の重要性を考えると、「不明」や「欠測」という言葉が当たり前なのは嘆かわしくさえ感じる。

(工藤淳、気象予報士・防災士、アップルウェザー社長、青森市在住)

※次回は3月20日に掲載予定。